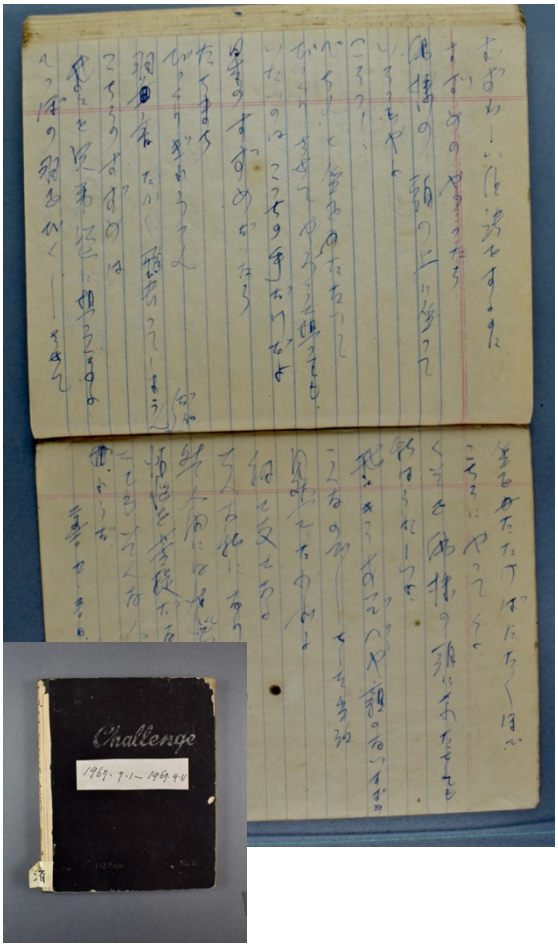
折々の「いま」―佐々井秀嶺保存史料から

茨城キリスト教大学文学部
鈴木晋介



日記表紙と「すずめのやつ」（1967年の一部）

はじめに―尋常ならざる「書き物の山」

「闘う仏教」の体現者にして稀代の荒法師、佐々井秀嶺師の生き様は、これまで多くの書物や映像によって伝えられてきました。なかでも師の「正伝」とも位置付けうるのが作家・山際素男氏の手になる『破天　一億の魂を掴んだ男』（２０００年）でありましょう*1。波乱万丈の大活劇を地で行く佐々井師の一代記を前に、私たちは「こんなひとがいるのか」と驚き、筆致に導かれるままに深い畏敬の念につつまれます。

その山際氏は同書のある箇所で、一般読者の私たちが抱くのとは別種のある驚きにふれています。山際氏が「驚嘆」したのは、厖大な量の文章、すなわち佐々井師が青年時代から欠かさず書きため丁寧に保存してきた日記や手紙の写し等、書き物の山でした。山際氏はこう評しています。「これは大変な努力であり、並外れた集中力とエネルギー、そして文才なくしてなしうる業ではあるまい」と（『破天』新書版２２９頁）。いま、南天会・佐々井秀嶺資料室とＢ．Ｒ．アンベードカル及びエンゲイジドブッディズム研究会（ＢＲＡ研）がデジタルアーカイブ化に取り組む「佐々井秀嶺保存史料」こそ、かつて山際氏を驚嘆せしめた当のものに他なりません*2。

私が実際に史料の分類整理に取り組み始めたのは２０２０年のことです。ときに佐々井師入魂の手記に引き込まれ、ときに鬼気迫る殴り書きに圧倒されながら、ひとつ思うようになったことがあります。それは、この書き物の山が、まったくもって尋常ではないということです。どういうことか。『破天』や『必生　闘う仏教』（２０１０年）を通じて、あるいは小林三旅監督の珠玉のドキュメンタリー映像『男一代菩薩道』（２０１４年）を通じて、私たちはインドの大地で「不可触民」解放運動の先頭に立って闘う佐々井師の姿を目の当たりにしてきました。それは、血を吐き泥にまみれてなお獅子吼する闘士の姿です。しかし同時に、その闘いと同じだけの長い年月、己の苦悩と日々深まっていく思想を、文字通り夜の目も寝ずに、徹頭徹尾書き続けてきた男の姿があったということなのです。そびえ立つ書き物の山を前に、そのエネルギーたるや…と思い遣るとき、もはや尋常ではないという言葉以外出ないのです。

佐々井秀嶺保存史料とは、佐々井師が闘いながら書いたものです。そこには、Ｂ．Ｒ．アンベードカルの菩薩道を承継しインドの大地にて２０世紀と２１世紀をまたいだ一人の日本人仏僧の思想の軌跡が刻み込まれています。そこにひとつの仏教史があるといってもいい。その学術的解明は畢竟人類の精神史の深奥に分け入っていくことに他ならず、その端緒がいまひらかれたのです。

佐々井秀嶺保存史料から

本稿では佐々井師のご承諾をいただいた上で、史料の実際の記述をわずかながら抜き書きして紹介してみたいと思います。整理作業の進捗上、ここでは渡印して間もない佐々井師の日本山妙法寺ラージギル道場時代を取り上げます。１９６７年８月、佐々井師はバンコクを発ちインドの大地に降り立ちました。同月のおわりにラージギルに入りそこから約１年間厳しい修行に明け暮れます。この間の消息は、『破天』新書版では１４６～１８５頁にかけて、『必生』では４６～６４頁にかけて伝えるところですのでご参照いただくとよいかもしれません。なお以下史料の引用はすべて原文ママ、括弧内は筆者の注記、「＊」は判読難の文字としています。

風雲白雲おどり狂う霊鷲山―１９６７年８月３０日

佐々井師がラージギルに入った直後、道場の八木天摂上人と未明に多宝山に登った際の記録が残っています。『必生』において山上の様子を次のように記す箇所がおそらく対応します。「やがて太陽が闇を破り、インドの大地が照らし出されました。私にとっても新しい夜明けでした」（『必生』、４７頁）。この場面、じつは史料の描写は得も言われぬ迫力に満ちています。曇天山上、タイコを打ち至心に題目を上げる佐々井師の眼前に突如として展開したのは霊妙にして荘厳な場景でした。

ところが不思議なことに霊鷲山第一峰の空は急に雲が四方に散っていくではないか。（中略）右に流れ左に流れ上に舞い上り下に落ちまるで風雲白雲おどり狂う霊鷲山を現出した。その中に一点＊＊＊黄金の太陽がこうこうともえいずる様に半身をのぞかせた。私は想わずこの不思霊妙な奇ずいに一倍力を預りタイコを打ち題目をとなへた。南無妙法蓮華経〻〻

おどり狂う風雲白雲、燃え出づる黄金の太陽。その虚空めがけて八木上人と佐々井師の渾身の法鼓と題目が響き渡る。場景の峻烈さに、吸い込まれるような感覚を覚えます。佐々井師はしばしば場景に仔細な描写を加えています。その文学性もさることながら、そうした場景に佐々井師の息遣いと全身全霊の求道の姿形が浮かび上がってくるようです。この日は佐々井師３２歳の誕生日でした。

温泉の場面―１９６７年９月１日

史料には佐々井師の日常も垣間見えています。それもどこか小説の一場面のような、小説を読んでいるような感覚を受けます。ここに挙げるのは、日本山妙法寺の酒迎上人との温泉の場面です。

夜おんせんにいって酒迎お上人が私にしみじみ云われるのは「佐々井さん、八木上人は日本山の宝です。只普通の坊さんだと想ったら大まちがいですよ」といわれた言葉を想い出す。酒迎お上人が八木上人を「日本山の宝」と云ったのは三度目であるが「只普通の坊さんだと想ったら大まちがいですよ」といったのはその夜が最初であった。

佐々井師がのちに八木天摂上人を「法縁の師」とまで敬慕することになるのはみなさんご存知の通りです。ラージギルはその法縁を明然と自覚していく時間でもありました。この記述は佐々井師が八木上人に出会ってすぐ、つまり自覚のはじまりの頃を伝えるシーンということになるでしょう。

すずめのやつ―１９６７年９月３０日

佐々井師の求道は苛烈を極めます。しかしその合間に穏やかな時間も流れています。これは本堂に入り込んだ「すずめ」との遭遇。自分たち人間はほとけさまの前でむずかしいことを考えたり、むずかしい説法をしたりするのに、すずめのやつは平気でほとけさまの頭の上にとまって自由自在に遊んでいる。追い払おうとしたら今度は寄ってくる。笑みのこぼれた佐々井師は小林一茶を引いてこんなことを記しています。

我ときてあそべや親のないすずめ
こんなのびのびとした生活
自然とたわむる　彼と友となる

そんな私になりたい
然し人間には煩悩が多いからなあ
煩悩を菩提だなんていっている間は
とてもそんな人間にはなれないようだ

佐々井師の書き物には、克明な日記や精神の深奥に迫る思想を連ねた手記に加えて、こうしたやわらかな詩的表現も散りばめられています。それらいずれもが、佐々井秀嶺の折々の「いま」を刻み込んでいるのです。

結びにかえて

最後に、明くる１９６８年元旦、多宝山上で記された佐々井師の一句を紹介して結びにかえようと思います。

元旦や　紫雲の朝日　虚空会に

この年８月、竜樹菩薩に導かれた佐々井師は一路ナグプールを目指すことになります。そこから半世紀を超える死闘（「生」闘と書くべきでしょうか）が待ち受けていることを、この霊鷲山虚空の初日に照らされた若き佐々井秀嶺はまだ知りません。

でも史料を通じ、時空を超えて、佐々井師の折々の「いま」に直にふれていると、どの「いま」においても佐々井師が「いつも、既に導かれている」ような、そんな不思議な気持ちがしてきます。

不思議といえば、もうひとつ。私もその末席に連なる佐々井秀嶺保存史料に関わるメンバーの多くは、この日の出の朝の時点でまだ生まれてもいません。そんな私たちが、佐々井師の折々の「いま」と直に向き合っている不思議。史料のデジタルアーカイブ化は、この不思議の縁をさらにひろく結んでいくプロジェクトということになるのかもしれません＊３

註＊１　南風社刊行の同書のサブタイトルは、光文社新書版刊行時（２００８年）に「インド仏教徒の頂点に立つ日本人」と改変された。なお本稿の『破天』の引用は新書版に拠った。

＊２　プロジェクトの詳細は根本達氏（佛教大学）による「佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブ化プロジェクト　５年間（２０１６年１１月から２０２１年１２月まで）の取り組みについて」（『龍族』２２号、４－５頁）を参照されたい。

＊３　本稿ならびに史料のデジタルアーカイブ化プロジェクトは、「トヨタ財団２０１９年度研究助成プロジェクト」の助成を受けています。記して謝意を表します。

佐々井秀嶺資料室
デジタルアーカイブ プロジェクト

南天会佐々井秀嶺資料室では、Ｂ．Ｒ．アンベードカル及びエンゲイジド・ブッディズム研究会と共同して佐々井上人、インド仏教にかかわる古い写真や映像をデジタルデータとして保存するアーカイブ化プロジェクトを実施しています。これまで佐々井上人の保存資料（写真、映像データ、日記、原稿、手紙、新聞記事、書籍など）を撮影し、一部は日本に移送して保存しています。佐々井上人の古い写真や映像をお持ちの方は、南天会事務局までぜひご連絡ください。

ロシアのウクライナ侵攻について
佐々井上人よりメッセージをいただきました

インド政府が慎重な対応をとる中、佐々井上人もこのような深刻な問題に対して、軽はずみなことは言えないとしながらも、ひたすらウクライナの戦火に追われる人々に同化して、その苦しみ悲しみを我が身に引き受けて言葉をつないでおられます。

主義主張はさておき、命を守ることを今まさに命が脅かされている人々の目線から訴えられます。月や宇宙に行けるほどの智慧を、何故こんな野蛮なことに使うのか、必死必生の佐々井上人の言葉を受け止めていただきたいと思います。

ウクライナ戦争について話してくださいという依頼がありまして、私のような小さい坊主がこの大問題に対して云々するようなことは出来ないのではないかと思うのですが、南天会からのお願いの通りに、申し上げてみたいと思います。私はこの戦争、ロシアがウクライナに侵攻したということは、ちょうど日本の大東亜戦争を思い出させます。日本が大東亜共栄圏という大義名分をもって東南アジアあるいは遠く欧州諸国にまで侵略的な侵攻を始めていったことです。大国ロシアが辺境と呼んでいるウクライナに対して侵攻している。自由主義と共産主義の対立がどこにおいても戦争の原因だと思います。ロシアもその辺一帯をロシア共栄圏に（しようとしている）。大東亜戦争のようなものです。私は戦前に生まれた人間なのでそう考えます。大東亜戦争最後の日本の空襲、東京大空襲、大阪大空襲、最後は広島、長崎も原子爆弾が使われ日本が焼け野原になってしまったという状況が目に浮かびます。いまウクライナに起こっていることは、家を失う、子供へも及ぶ無差別な攻撃をウクライナに与えている。事情はいかにあれ人道主義においては絶対に良いことではありません。許されないことだと思います。まして、私たち宗教家にとっては不殺生戒という言葉があります。仏教において大戒であります。かつて私のお師匠、高尾山薬王院の故山本秀順ご尊師は不殺生戒の大戒をもって戦争反対を唱え、巣鴨の刑務所に約５００日入り、戦時中は国賊扱いを受けておりました。

絶対戦争はダメです。空襲のあった時代を、逃げ惑う女子供たちが手を取り合って防空壕へと逃げ惑い、焼夷弾で死んでいくという惨状が目に浮かんできます。今のウクライナもそうだと思います。仏教界は何をしているのでしょうね。日本の仏教界も共産主義、自由主義はさておき、人命尊重という立場から全員が揃って世界の仏教界と立ち上がるべきである。インドは政治的には中道です。モディ首相は中道を選びました。かつてネール首相が第二次世界大戦で中道的な立場をとったと思いますが、今回もモディ首相は中道。日本は米国側についておりますが、明日の日本はロシア、中国に睨まれ、尖閣問題、台湾問題、沖縄問題と領土が占領されることも、悲しくも瞼に浮かんできます。

人命尊重の立場をとって、ウクライナがなんとか焼け野原にならぬよう、日本の空襲時代のような惨々たる現状にならないことを祈っております。胸が痛くなります。

（未来の）日本の惨状を今、日本の若者は考えているのか。日本の政府は戦後生まればかりだ。その惨状が目に浮かんでいるのか。

思想はどうであれ、人命尊重は絶対です。寒い雪国でさまよい、５０キロも歩いている子供たち、逃げ惑う家族、その惨状が目に浮かび、どうにもならないです。ロシアは原発そういうところも破壊（占領）したと、そして放射能混じりのものを振りまいているとか、ミサイルをあちこちに打ち込んでいるとか、現代２１世紀のこの文明の開けた時代にそのような野蛮なことができるのでしょうか。宇宙にも飛び、月にも降り立つというそのような人間の知能が未来の平和を約束している時代、あんな野蛮な殺人鬼により人間が滅ぼされていく、断じてやめさせるべきです。日本の原発問題も問題になっています。そしてウクライナも原発が問題になっています。

ロシアはトルストイが生まれた国、私が尊敬するトルストイが生まれたロシアです。それが殺人魔となっている。なんとか平等に、お互いが侵略しないというような約束、平和的な約束ができないものでしょうか。領土不可侵条約を結ぶのが現代２１世紀の人間の頭脳です。野蛮ではないんです、平和を望んでおります。お互いの領土を守れる機能を固めて戦争を絶対にしない、人類がもたらした殺伐とした光景を繰り返さないという条約はなぜできないんですか。日本でもこういう状態が続くと安閑として居ることのできない問題が目の前に迫ってきているということを、なぜ日本の青年は考えないのでしょうか。目的のない人生を送っているのか。ウクライナは平和な国であると私は信じていましたが、歴史を見ると両陣営の餌となって人命が損なわれ、失われる、残虐な殺戮戦争の繰り返しがあったといいます。戦争を日本はしないと誓った日本の民衆は安心して安心して平和に耽って、おいしいものを食べて、大酒飲んでふらついているという状況だ。私は眼前に浮かんでくる。アンベードカルという偉大な指導者を生んだインド国で仏教徒は必死になって勉強し、世界に向かっている。仏教徒は中庸の立場をとりながらも、人間の権利と平等をまた復活せしめようとする。インドの政府、中道を唱えて、戦争反対とするインド政府の姿勢は立派であると称賛しながらも、インド国内におけるカーストシステムは、非常に貧しい民衆の中で未だ生き続けている。５４年間インドで生き抜いているこの沙門秀嶺にとって、インドも将来貧富の差が激しくなるのではないかと危惧している。仏教徒は外国と喧嘩をすることなく、世界の国々で君臨している。平等と自由とインドの仏教徒は君臨している。アメリカにもロシアにも日本にもいる。フランス、ドイツにもいる。インド仏教徒は我々の希望である。ウクライナにも大勢のインドの方がおります。そこで倒れている人もおります。

なぜロシアに注目をしないのか、当然していると思うけども、両翼の指導者たちが、貧しい民衆、一般の民衆を殺していっている。武器の餌にしている。私の尊師、高尾山の山本秀順尊師が、佐々井よ。お前は貧しい民衆とともに働け、という言葉がよみがえってきます。その貧しい民衆が倒れて、ウクライナでもインドでも倒れていっている。世界で倒れていっている。私の使命は彼らと共に生きていくことであります。民衆と共に私はあります。ウクライナの民衆と共に私は生きております。ウクライナの民衆と共に私はロシアの爆撃にあっております。ウクライナの民衆と共に私は防空壕で抱き合って生きております。どうか戦争を止めてください。ロシアの皆様、世界の皆様、アメリカも、侵略的な行為はやめろ！台湾を守るとか日本を守るとか、沖縄を守るとか言っているけれども奪還するのはなんの為だ！ウクライナで、ウクライナの民衆は倒れていってるんだぞ！ウクライナの民衆は倒れて行ってるんだぞ！飢えと乾きと寒さと凍って死んでるんだぞ！わからないか！馬鹿者！

日本の仏教徒も宗派根性など捨ててしまって立ち上がって、ウクライナに行って死んでしまえ！福島に行き、原発事故について日本政府をものすごく罵ったことがある。今でも南天会三旅氏のところに（映像が）あると思う。時の（菅）首相に日本で会った。四国巡礼をして罪を償っていた。ウクライナは、原発で放射能がばら撒かれている。ウクライナの皆さん！インドで一人の小さな、小さな坊主が声をあげて叫んでいる。お宅らと共に泣いていると、思っていてください。インドの中にもウクライナの民衆と抱き合って死んでいる佐々井秀嶺という坊主がいるということを知ってください。知らなくてもいい、それだけです。

こちらから動画を
ご覧になれます

佐々井上人専用車寄進報告

２０２０年の龍族１７号から勧募いたしております佐々井上人専用車寄進につきまして、本年３月に支援金額が合計２５０万円に達し、一旦全額をインドに送金して専用車購入に使用いただくよう連絡をいたしました。

この件に関しまして、佐々井上人からこの度の車寄進の経緯説明と、専用車購入はまだ行わず、現在の３台所有の状況を維持しつつ故障等による現状変更に対応するために、寄付金を保管させてほしいとの返信がございました。

以下、佐々井上人より。

※

全日本の南天会会員の皆皆様方、私は天竺の、すなわちインドナグプールの佐々井秀嶺であります。

この度日本の多くの皆皆様方の御慈悲によって、私のインド大陸を駆け巡る乗用車のためのご寄付を南天会事務局よりご送金頂きました。

現金２５０万円となっております。

そこで今回の乗用車購入その経緯について皆皆様方に説明申し上げ、またお願い申し上げることがございます。

２０１４年の夏に私が大病を患いまして、生死の境を往還して再び命をつなぐことになりました時、日本でこのことをお知りになった日蓮宗信徒の小川法子様、この方は現在ナグプールの北のカムプティ市に建設されておりますドラゴンパレス寺を寄進された方ですが、この小川様が、マハーラシュトラ州の元州会議員シュレーカークンバレさんを通じて、私に使ってほしいとトヨタの innova 車を寄贈されました。

私はこのトヨタの innova 車が小川法子様より寄贈されたと言う事は知らされず、シュレーカークンバレさんから寄贈されたものとばかりに思っておりました。シュレーカーさんは私への innova 車供養のことを全カムプティ地方にも大きく宣伝し私にもそのように言われていました。

小川法子様は２０１９年の９月２日に死去されました。シュレーカーさんはその葬儀に参列するために日本に参りまして、日本から帰ってきたのが２０１９年の１０月頃であります。

その時点においては innova 車はまだ私のもとにありましたが、ある日突然私の元から消えてなくなりました。

私は盗難にあったと思い警察に報告しますと直ちに警察は２０名から３０名で捜索し始めまして、供養先のカムプティ市のシュレーカー氏の家に行きますとその innova 車が置いてあり、もう一つの鍵が自分のところにあったので車を保管していたラビメンデ氏の家に行って持って帰ったということでした。この車の名義は私自身の名前になっておらずシュレーカー氏の名義であったので、罪には問えないということになりまして、小川法子様が亡くなったことを契機にシュレーカーさんは車を自分のところに取り返したということになります。

ちょうどその時は大改宗式の記念日でありまして三日間改宗希望者がおって、全インドから来る希望者を仏教徒にする改宗儀式を行っておりました。それでどうしても車がなければ困ると言う局面に至りました。あちこちから列席して下さったお坊さんを送ったり連れてきたり、残っておった二台の車で奔走しておりました。

しかし私の手元にあった自分の車がなくなってしまい、これは大変だという事で、その時、２０１９年１２月頃と思いますが６ヶ月のビザが切れて日本に帰ることになっておりました亀井竜亀氏に、日本に帰ったら南天会に相談して１台車が欲しいと、どうにか調達してもらうことができないか、なるべく早急に日本車の innova が欲しいんだと。というのは、私の身体も弱っているしインドの車は冷房もはっきり効かないしガタガタなので本格的な私の身体を休めてインドを駆け巡ることができる乗用車が欲しいと言うことを南天会に伝えてくれないか、代表の佐伯隆快師に伝えてくれないかと言うことを亀井竜亀氏にお願いしました。

それで亀井竜亀氏は日本に帰ってすぐに南天会に赴きこの佐々井の年取った身体が休まる乗用車、日本車の innova が欲しいと申しておりますが何とかならないかと言うことを佐伯氏にお願い申し上げました。佐伯氏はこれに基づいて直ちに機関紙龍族に佐々井師専用車乗用車募金運動をなされたものと思います。

その翌年２０２０年２月佐伯隆快氏南天会一行が２月６日のチャッティスガル州ドンガルガル郡の国際仏教大会に出席してくださるために１８人ぐらいでインドへ参りました。その際に亀井竜亀氏も新たにビザを取って一緒に一行と共にインドに参りまして早く来られたことを喜びました。その際兼ねて龍族機関紙によって募金くださる方々を募っている記事が出ていたのを河野太通御大御老師様はご存じで直々に新車購入のために５０万円を供養なされたと大悲の御法恩に接し御大御老師様の供養金として預かりました。そして私が持っていると分からなくなる可能性があるので亀井竜亀氏に持っておいてくれと託しました。竜亀氏はその後ずっと太通御大御老師様の御慈悲の大金を預かっておりましたが、コロナゆえに帰らざるをえなくなったときには私の元へ預けて帰国されました。御大御老師様の供養金はそのまま金庫に入れて現在まで今も大事に

保管致しております。

さてその後私の車が、老体を休めて乗れる車がなくなって困っておりましたところ、インドラ寺の、私が２０年３０年間ぐらい止住している寺でありますが、そのインドラ寺の事務総長アミット・ガドパレー氏が古い型のinnova 車ではあるが自由に使ってくれと私に使うことを許してくれました。このinnova 車は彼のお父様でありますガドパレー様がご老体になって病気になって体が、自由に動けなくなってしまい、ほとんど乗ることがないので使っていいよと言うことで、ありがたく使わせていただいて早や3年、２０１９年の終わりからインドで使わせて頂いております。私の専用車のように使わせていただいております。もちろん修理代とか保険代とかそういうものは私が全部払っております。

こういうわけでinnova 車がふたたび手に入り、地方に出張する時は疲れはしますけれども楽な気持ちで乗ることができます。ＡＣもはっきりと涼しい風も入って来ます。時たまお父様が病院に行く時はこの車が大きいので持っていって病院へ行って連れて帰ってまた私に渡すと、このようになっております。この頃はほとんど預けている私のところに車はあります。ですけれどもなんと言っても私の自分の車ではないので故障が起きたら大変だ事故が起きたら大変だと気をつかっております。

私が使っております3台の車は、私自身が運転するのではなく各車運転手を頼んで運転してもらうので、また大勢のお坊さん方を乗せて全インドを走っておりますことから、いつ何時事故が起こる可能性があり、今までも運転手が友人に貸して死亡事故を引き起こし大変なことになったこともございます。

アミット氏の厚意により、緊急に私の乗用車を準備する必要はなくなったものの、他人の車を使用させていただいていることで非常に心配でもあり、また他の2台の車についても、インドの過酷な道路状況によりいつ何時故障や事故に遭う可能性もありますことから、引き続き南天会において専用車の寄進を募っていただくことにいたしました。河野太通御大老師様よりのお金は、インドにて保管し、その後の南天会の皆さまよりお送りくださった支援金は、南天会事務局の方で保管していただき、龍族誌上にてご支援者のお名前を掲載していただいておりました。

そして本年2月か3月ごろであったと思いますが南天会事務局佐伯隆快氏より私の専用車寄進者名と題して、この私の乗用車の寄進者名簿が送られて参りました。佐伯氏からは、支援金募集を開始して3年が経過し現在までに集まったお金で、トヨタ車の新車ではなくても乗用車を購入してほしい、との連絡がありました。

その寄進者名簿の下には合計２５０万円と言う総額の記載がありました。

さらにその下にはもし乗用車を購入した場合は寄進者の代表的お名前を車体に刻んで頂きたい、真鍮のようなものに刻んで車体につけて頂きたいと言うような事です。

寄贈は南天会となっております。

それで車体に寄進者のお名前、南天会が代表として、河野太通、宮淵泰存、遠山睦子、奥平心月、白井昌子、小林三旅、佐伯隆快、李道道、漆間宣隆、荻須眞教、黒澤雄太、坂田龍晴、里形玲子、志賀浄邦、新城晋一郎・さやか、田口裕視、土居奈生子、平原正雄、根本達、原田裕介、福瀬くに子、武藤政和、渡邉晃、渡辺典子、盛田美恵、武田英敬、長命密寺、

合計約３０名の寄進者、お寺の名前が記載されておりました。匿名の方もおられるようでした。また別に南天会として２万４５００円御浄財を御寄贈を頂いております。

而して合計が先ほど申しました２５０万円となって、２０２２年3月３１日、銀行よりインドの方にご送金頂いており翌月２日頃、私はご送金を拝受致しております。

それで佐伯隆快南天会代表と致しましては責任があること故、なるべく早くこのお金を以て購入し、さらに先ほど申し上げました約３０名ほどの協会、お寺、個人名の名前を刻んで購入車に貼り付けてもらいたいとお手紙も頂いております。

しかし私も毎日多忙で８８歳、酷暑で現在は非常に暑く昨日は４６．１度となっております。この多忙と年老いたこの身を酷使した身ではこの酷熱期、大変焦熱地獄の中にいて奔走しておるような気持ちでありました。特に今年はアンベードカル生誕祭、5月のブッダ生誕祭、しかも受け持つ全インド仏教徒の総本山とも言えるナグプール市いわゆる南天竜宮城と言われる改宗広場で今は会長でありまして、現在全世界で最も生きた仏教を守りかつ生きた仏教を存続続命せしめねばならない必生の大使命を双肩に担って８８歳老骨にむち打ち、ここ2、3カ月間は南天竜宮城から遠いボンベイ近くまでナシック地方、またマラタ地方2回3回と往還往来、北はジャバラプール地方、ナグプール周辺のいわゆるヴィダルバ地方、東西奔走致しまして、いささかブッダ大生誕祭が終了致しました途端に私は気が落ち抜け、ちょっと体を壊したなぁと自分で思い、約1週間ほど休ませて頂きました。

そのような事がために、なるべく早く南天会様にこのご送金頂きました２５０万円の乗用車の件につき詳しくお伝えいたしたく年々刻々と焦り焦ってはおりましたが、多忙のため、あるいは体調がいささか壊れましたが為に今日の日まで遂にのびのびとなってしまったことを心より心より沙門天日秀嶺深くお詫び申し上げてなりません。

この今申し上げておりますこともペンで

書く気力がなく亀井竜亀氏の録音機をお借りしましてかすれた声を吹き込んでおります。そして竜亀氏の時間を頂きこれを文章にこのまま文章に、直して頂き南天会にお送りしようと思っておるところであります。

さて現在私のところには３台の車が乗用車用としてあります。これらすべて３台が私個人の乗用車とはなっておりません。地方地方に出張した時には比丘衆５人、７人、１０人と乗り込み、又は尼僧達も乗り込み１０何人と言うところになりますので２、３台と連ねて行かねばならないこともあります。ですから３台は不可欠であります。３台もの車は私と一体同心であります。佐々井は３台も持っているのかと思われる方もおられるかもしれませんがインドの仏教徒は私の多忙と私の真心込めた菩薩行と言うものをようやく飲み込んで頂いたものか１車であろうと３車であろうと私と一体比丘僧伽と一体とお考え下さり、３車３台の乗用車を持つ現在の私の身を批判非難して蜚語をする人はいないようで、行く途中途中はかたじけなくも御勿体無くも合掌して下さります。有難いことであります。

しかし私自身から振り返ってみますと３台も持っているそんな坊主は今のところ私１人じゃないのかと思い周囲に遠慮の思いを巡らせております。

お坊さんは乗り物なしでは活動できないこの広大なるインドの大地であります。大概のお坊様がオートバイだとかスクーターだとかバイクだとか言うような個人的な乗り物を購入してそれであちこち祈祷祈願に行ったりしております今日この頃であります。私の活動はヴィダルバ一円マラタ地方のほうにも時には出張しなければならず、北の方はジャバラプールあるいはグジャラートと言うような所に行かなければならないので３台の車は私と一体となって動いてくれています。運転手はいないので亀井竜亀にお願いしたり、あるいは専門の日雇い運転手を頼んで駆け巡って、とにかく３台自動車は私に欠かせない１台も欠かせない一身一体でインド大陸を駆けめぐっておるのであります。

この点、日本の皆様方にはあるいは南天会の皆様方にはよくご理解頂き、インドの事情を私の地位を、私の多忙、私の身体の酷使を、私の年齢を考えくださいましてご理解くだされば御法甚の至りであります。

ですが客観的に見ますと３台も佐々井は車を持っている、第三者の人から見ますと３台もの車を持っている、我々は１台しか持っていないんだぞと言うようなことも思って居られる人も確かにおられる、そういう人も佐々井は一生懸命に真面目になさって居ると思いくださる方もいるかと思われます。

これ以上の車は故に持つ事は許されないのです。３台で時が来るまで乗りまくりやり通します所存であります。いずれ３台の車もこの道の良くなったインドとはいえ、田舎に行きますと地方に行きますとガタガタの道を通らなければならないこともあります。いずれボロボロになり壊れ壊れていく事は務めと同じであり車の寿命も１年１年と酷使されて使われ使われて車体を壊し車体の寿命も縮まっていくものと思います。

故にこの南天会様に御寄贈を頂きました私の乗用車代金２５０万円、御寄贈下さいましたすべての方々、皆皆様方に宜しくご了解頂き伏してよしなに御推察御願い申し上げます。

一旦は２５０万円にて購入できる車を買うことを了承し、佐伯氏にもそのようにお伝えしましたが、この２５０万円の乗用車代は将来に車が壊れもう動けない寿命が終わったと言う決断がされた時に新しい車を購入するために今しばらく私の銀行口座に止めおきさせていただきたいと思います。

河野太通御大御老師様の大慈悲のある５０万円はそのまま私のところで保管致しております。

ご了解下さいますよう南天竜宮城の沙門天日秀嶺重ねて伏して伏してお願い御嘆願を申し上げます。

また現在は全インドですべてのものが物価高となっており、貧しい人は食べられないで餓死していく人もおります。これからますます貧しい人は塗炭の苦しみ、塗炭のあえぎに帰っていくでしょう。その悲鳴、嗚咽、呻き、危機に瀕した人達の姿はインドの富裕層にはいまだに残るカースト意識によって直に聞こえず見られず同情されないあまりに放置され行くことでありましょう。

現在はスリランカもパキスタンも東南アジアもミャンマーも大変な状態でありますことは日本の心ある皆々様方にはお分かりであり、同体大悲の大悲心で心をお痛めになっていることと思われます。

このことはインドの下層民衆においてもしかりであります。今朝の新聞にはニューデリー高等裁判所が一切の宗教の改宗は許さない、改宗する事は仏教徒にしろキリスト教にしろ回教徒にしろすべては許可しないぞ、と言う判決がニューデリーで高等裁判所において出されております。これに対して最高裁はどう答えるかと言うことであります。

今や世界は騒然と致しております。インドの物価高も日増しに高くなっております。貧しい人たちはどうやって生きていけばいいのか人間平等を訴える仏教への改宗式もその道が絶たれてしまおうと、すでにインド国内にある各州の州の中においてインド民族党すなわちＢＪＰ政権の支配権をもつ州々おいてはそのほとんどは改宗式はいかなる宗教も禁止されております。

インドの世界的大革命者ビームラオアンベードカル大菩薩は憲法には平等・博愛・独立・自由の中に於いて人権の尊重と信仰の自由を堂々と高らかにうたいあげて居ります。仏教精神に於いて憲法を起草しそれをイン

ド国憲法と定めておる現在に於いて、何故に貧しき民衆の上にカーストの押圧的壁をもってその人達の世界をバラモン至上主義のマヌ法典的思想をもって上から押さえ込もうとしているのであろうか。物価高において飢え、もがき号泣し非人間のように生きていく人たちの姿が見えない彼らに。仮に立正安国論と言う大憲法をもってしてもインド国は平等にならないのか。共々印度全国民和合共存し、全印度民族人権と生命の尊重を謳いあげて行くことができないのであろうか。

物価高にあえぐ人達、今翻って自動車社会でもそうであります。インドは年々人口が増加し、車も益々増えております。車代も上がってきております。

以前にもお坊さん方が乗る乗用車の寄進を南天会で募集していただき、名古屋の前田卓幸様が奥様のご両親の長寿のお祝いとして１５０万円を寄進され、マヒンドラ社のボレロという乗用車を買い求めました。

この時も新車を購入するには２０、３０万円ほど足りなかったので、亀井竜亀氏がその不足分を補い購入したように記憶しております。

そこで今回２５０万円という御浄財を御寄贈いただきましたが、現在の車の価格は数年前よりだいぶ上がっております。例えば私の望んでいたinnova車が日本のトヨタ生産ですが１３種類のinnova車が現在発売されております。１８ラック、２０ラックと１番良いのが２４ラックとなります。大変な金額です。南天会様よりお送り頂いた２５０万円は１５ラックルピーです。１５ラックでは１番下の１８ラックにとても遠く及ばないのです。

現在インド国産車ボレロが１４ラックと言われております。乗用車として考えられるのはマヒンドラ車の国産車ボレロと日本車のinnova車です。

とにかくいずれにしても新車を購入する事は２５０万円では買うことができないということで、３台の車がそのいずれかがボロボロになって破損し、もう絶体絶命でこれ以上動かないという時まで、もう少し御慈悲が皆様御一同様に拝受頂けましたならば南天会にお送り届けておいてくだされば何年か後には新車購入価格に追いつくことができることと思いますので、この所よくご理解ご了承頂きまして今しばらくこの２５０万円は私の個人的銀行口座に預けさせて頂きたく思います。

どうか御寄進下さいました皆皆様方、御一同様方にはこの現在のインドの事、私の３台ある現在をお考え下さいまして、新車購入にはお金が未だ足りないことをご配慮下さいまして、今しばらく銀行口座に預け置かせて頂きたく思いますのでよろしくご了解下さいますよう伏してお願い申し上げる次第であります。

もし万が一この長引く銀行口座への保管あるいは現金の保管を佐々井が将来金に困って使うんではないか、違うところに使ってしまうんじゃないかという御不審があるならばその御不審をお受け致し、お知らせ下さればそのお方様には返金することに致します。そういう御不審がある方がおられましたならば遠慮なく私にお申し出くだされば ありがたき幸せと思うのであります。

御寄進下さいました皆皆様方に対しまして、また南天会関係者御一同様方に対しましても、今年２０２２年３月３１日、私方にお送りくださいました乗用車購入のための御寄進２５０万円のお金は、まだ新車を求めるだけのお金に到達せず、この現在ある３台の車がいずれ寿命が来るかと思いますので、その時までどんな中古車でも安い車でも買い求めて３台にしなければ私のサンガ、インド法衛軍、ビクスサンガの行動運動が成り立ちません。よってそれまでお待ち下さいますよう伏して伏してお願い申し上げます。

どうか南天会様にも特に龍族を編集くださっております代表者佐伯隆快和上様にもくれぐれも御責任があるとは思いますがご了解ご理解下さいますよう伏してお願い申し上げます。

幸いにしてアミット・ガドパレー氏インドラ寺の事務総長の使っていいよと言っている与えてくださっているinnova車は日本トヨタ車でインド進出初期の車で非常に頑丈であります。初期生産車と言うのはいずれも頑丈であります。まして外国車は頑丈に作ります。特にトヨタはインドの大地に合わせた、悪い道に合わせた、田舎道にも行けるように合わせた設計で作ったと言われている頑丈なものであります。だから大して故障も起こしませんし、まぁタイヤを１回取り替えました。また町々で警察の車に衝突したり、また他の車にすれ違いざまにやられたりして破損したりしたとこもありますがそれもアミット・ガドパレー氏が金を出してくれたり、私も出したり修理して元のように直しております。

もうだいぶ古いので車体も大分痛んでおるようで、こないだのオイルチェンジには３ラックほど使い車体を全部チェックし部品を取り替えその時にもアミットが２ラックを出してくれ、私が１ラックを出したというようなことになっております。ですからまだ使えると思います。

また前田先生から送られた車は２０１８年ですから４年ほどでまだまだ使えます。トヨタの車よりも車体は新しいのでまたマヒンドラと言う会社はだいたい車体の作りが頑丈で車体のジープマヒンドラのジープとか車は皆エンジンが強いようであります。ですからまだ大丈夫です。

それからスモウ車は仏国士の会が寄贈してくださってもう会長様は亡くなって５、６年になりますが、車は１６年間使っており今

年度で寿命がなくなりました。然しインドの車の規則で車の寿命が切れても５年間は引き延ばしがきくと云う法律があるらしく今回５年間寿命引き延ばし金に８７００ルピーを当局に払い込み、後５年間は使用許可がおりました。故にもう５年間は使えると思いますので、また当分の間３台が私の一身同体となってインドの荒野をインドの山河を渡り見守り走りまくる事と確信致しております。

しかし寿命は生あるものは滅す形あるものは必ず壊れる道理のごとくやがては私も車も死にますが後から続く竜亀がどこまで成長するか、この車の寿命が終われば壊さなければなりません。その時にはまた新しい車が必要ですからまた皆様のご支援を伏して伏してお願い申し上げます。

それでは今回はこれにて失礼さして頂きます。ありがとうございました。

長い文章となり申しわけなく、つたなき文章と思いますが龍族紙面で読んで頂ければ私のインドでの気持ちもいささかお分かり下さることかと思います。

合掌三礼

南天竜宮城沙門天日秀嶺　九拝

以上、佐々井上人からの返信です。この度の専用車寄進につきましては、当初緊急を要する状況であったため高額な設定の募金をお願いし、またなかなかインドの状況をお伝えすることが出来ず、２年以上が経過してしまいました。

この度の佐々井上人からの申し入れを受けて、支援者の皆様、南天会会員の皆様にご報告させていただき、専用車寄進の経緯、状況説明をさせていただきました。

佐々井上人のお気持ち、また現地の社会状況交通事情等を考慮いたしまして、専用車寄進として勧募しましたお金はインドにて保管し、現状３台の車の体制に支障が出た場合に使用できるよう準備しておくことが最善かと思われます。また佐々井上人の活動において大変重要な交通経費等への支援について、引き続き専用車寄進として勧募いたします。

会員・支援者の皆様には、ご不明な点等ございましたら南天会事務局にお問い合わせいただき、今後ともご支援ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

南天会事務局

現在活躍している３台のうちの１台
（仏国土を守ろう会　寄贈）

今よりおよそ１００年前、広島県東城町、中国山地の山間の街から一人の青年が東京を目指して旅立った。世の中の苦を救う宗教者を志し、「仏様を背に負い汝の信心を杖に突いて行け。」という亡き母の言葉を胸に刻み、その眼は求道の志に燃えて真剣な光を湛えていた。後に新興仏教青年同盟を組織して、戦争へと突き進む日本および日本仏教に警鐘を鳴らし続けた稀有の仏教者、妹尾義郎。その仏陀の僕としての行動、信念はゆるぎなく、あらゆる世事に惑うことなく純粋性を貫いた。その姿に共鳴した心ある仏教者が、全国で彼と共に立ち上がった。

戦争に突き進む国家を批判し、それに追従する既成仏教教団を断罪し、社会の変革を目指して、全国の仏教青年に呼びかけた新興仏青。その反時代的な主張に赤化した仏教などと揶揄されたが、妹尾義郎の背中には、故郷東城を旅立った日から背負い続ける仏陀釈尊があり、戦争に対し、帝国主義に対し、資本主義に対し、仏教徒としてどこまでも真直ぐに挑んでいく。

妹尾義郎（中央）と新興仏青の人々
昭和８年　妹尾義郎日記より

しかし、彼らが仏旗を掲げて立ち向かった世間は、すでにだれにも止められない滅びの道へ突入していたのであった。関東大震災、世界大恐慌などで悪化した国内経済の立て直しを植民地拡大で国外に求め、資本家と無産階級の埋めようもない格差による怒りを排外主義で誤魔化して、これに異を唱える人びとを弾圧し、日本は戦争への坂道を転がり落ちて行った。

２２６事件の起こった昭和十一年の暮れ、妹尾義郎は「国体を変革することを画策する反動分子」として治安維持法違反の疑いで検挙された。翌年新興仏青幹部会員合わせて百数十名一斉検挙。昭和十五年に妹尾以下幹部の有罪が確定し代表の妹尾は実刑判決を受け投獄される。この間世の中は、ついに日中戦争がはじまり太平洋戦争へと突入していく。

妹尾たちと共に起訴拘留された幹部の中に、佐藤秀順という若き真言僧がいた。のべ４７５日にも及んだ拘留期間、当時の軍国主義的な体制の中、未決ながら罪人同様の処遇を受け、三畳間に十数人も押しこめられた状態で、病人に薬も与えられず、同時に逮捕された共産主義者や朝鮮人にはひどい拷問が与えられた。皮膚病に犯された佐藤は、監獄内で座禅を組み、過酷な状況を耐え抜いた。背にした壁には背中からにじみ出た血で人型ができていた。

新興仏青は壊滅状態となり、釈放された多くの同盟員は、官憲の監視を受けまた世の中から指弾され、戦時体制の中を隠れるように暮らしていた。昭和十七年に刑期を終えた妹尾は、新興仏青の本部として長年暮らしていた雑司ヶ谷の家を売り払い、長野県小倉村に移り住み、懺悔と信仰の日々を送り、そこで終戦を迎えた。

戦争はすべてを飲み込んで、実に国民の一割が死に、それ以上の夥しい人々が命を落とした。

佐藤秀順も同じく長野県松本市郊外の兎川寺に入り、山本姓となっていた。戦後の混乱期、病身をかかえ開拓民のような困窮した生活を送る師の妹尾を度々訪れて話を聞き、またその生活を支えた。後に山本は本山の高尾山薬王院に帰り、四十二歳の若さで第三十一世貫主に就任。妹尾義郎先生の信念を継いで、殺生禁断の石碑を掲げ、生き物を殺さない不戦の誓いを新たにした。

時代は下って昭和三十五年、師の妹尾義郎の出生地東城にほど近い、県境をまたいだ隣の岡山県新見の山中から常人ならざる苦難の末に、一人の青年が高尾山にたどり着く。山本秀順貫主の法弟、勝沼大善寺の井上秀祐師に連れられたその青年は、秀順師に得度を願い出て〝佐々井秀嶺〟の法名を受ける。

闘う仏教の法脈は、こうして連綿と引き継がれ、インド仏教徒の運動を支えている。そこに脈々と流れるのは、一切の生きものの命を守る仏陀釈尊の願いである。我々仏教徒はこの願いを決してあきらめてはならない。私たちもまたその背に仏様を背負って町へ出よう！苦しむ人々が立つ大地に立とう！

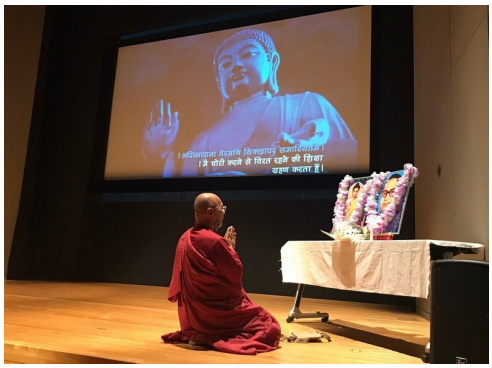
一心念誦堂寺報「除暗遍明」３９号より転載

インド大使館『アンベードカル生誕祭』

髙山龍智

去る４月１４日、東京九段のインド大使館に於いて、日本在住インド人仏教徒の非営利団体：アンベードカル博士国際教育協会（Ｂ．Ａ．Ｉ．Ａ．Ｅ．）主催による『第１３１回アンベードカル生誕祭』が開催されました。本年は〝日印国交樹立７０周年〟に当たり、その関連行事として、生誕祭当日はサンジャイ・クマール・ヴァルマ駐日大使も御臨席下さいました。

まずは、パーリ語「三帰依五戒文」の唱和から。



続いて、インド大使サンジャイ・クマール・ヴァルマ氏から御祝辞と記念の御言葉を賜りました。

サンジェイ　クマール
インド大使

祝賀行事に移行し、初めは古参のＢＩ．ＡＥメンバーによるアンベードカル讃歌「भारत के निर्माता（インドの創造者）」合唱。原曲はボリウッド挿入歌のスター歌手たちが４年前に総結集して作った天竺版「We are the World」です。

『インドの創造者』を熱唱する
在日インド仏教徒

この日のために練習を重ねて来た〝ほとけの子〟らによる古典舞踊、英語スピーチ、日本語スピーチ、ボリウッド・ダンスの披露。仏典や仏伝に記される「歓喜踊躍(かんぎゆやく)」、そして「富楼那の説法」を地で行くパフォーマンスです。

仏教は子供の元気の源です

日印両国のゲストによる講演が続き、最後は集合写真と恒例の「ジャイ・ビーム！」。向かって右端で拳を振り上げているのが私。

在日インド仏教徒による団体
BAIAE

ジャイ・ビーム（我等に勝利あれ）！

あえて言うまでもありませんが、生誕祭当日、盛装で参加したインド人仏教徒も、日頃は一般の主婦として、あるいはサラリーマンとして、日本社会に溶け込んで生きています。そして彼らは、祖父母の代まで(!)故国インドでは〝ひと〟として認められていなかったのです。

１８９１年４月１４日、アンベードカル博士はいわゆる「不可触民」の子として生まれました。不可触民とは、ヒンドゥー聖典『マヌ法典』に基づき、触れてはならない、声を聞いてもいけない、その影を踏んだだけでも穢れる、とまで忌み嫌われた最下層の身分です。

数限りない差別と虐待に耐えて勉学に励んだアンベードカル少年は、奨学金を得てアメリカやイギリスに留学。そして政治学、経済学、社会学、歴史学、法学など多岐に渡る分野において才能を開花させ「Ｄｒ.」となったアンベードカル青年は、帰国後、インドの階級差別撤廃運動に着手。その過程で、社会改革と人間解放のための宗教的・思想的な支柱として、仏教を復活させる必要性に気付きました。

１９４７年、インド独立に際して初代法務大臣に就任。１９４９年、あらゆる差別を禁止じた現行インド憲法を作り上げました。しかし法の整備だけでは無くならない不正義や不平等と闘うべく、１９５６年１０月１４日、中央部ナーグプール市において、数十万の被差別民衆と共にヒンドゥー教から仏教への集団大改宗を挙行し、仏教の復興を宣言しました。

この被差別民衆の中に、今は日本で暮らすインド仏教徒のお爺さんやお婆さんがいたのです。

最後に個人的な述懐――

こんな、箸にも棒にも掛からない私を〝一国の大使館行事〟にまで引っ張り上げてくれたのは、師父：佐々井秀嶺です。そして、いつも私の背中を押し続けてくれたインド仏教徒のお蔭です。

どんなに感謝してもしきれない思いを込めて…

オンライン誕生会開催

インド・ナグプールの佐々井上人とつないでオンライン誕生会を開催します！

昨年に引き続き、インドの佐々井上人とつないでオンライン誕生日会を開催いたします。毎年ナグプールでは、地元の仏教徒の皆さんが佐々井上人の誕生日（８月３０日）を盛大にお祝いしています。現在のインドの様子などもお話しいただき、参加者からのお祝いの言葉を届けたいと思います。

参加希望の方は、南天会メール（nantenkai@gmail.com）まで、住所、氏名、連絡先メールアドレスを明記の上お申し込み下さい。

（先着１００名　参加無料）

日時は佐々井上人と調整中（８月３０日前後）です。
参加希望のメールを送って頂いた方に、
決定次第、改めて日時を記載し返信させていただきます。
また、フェイスブック、ホームページにも決定日時を告知いたします。

※Ｚｏｏｍミーティングによる交流会です。
参加ご希望の方はお名前、連絡先、住所、「佐々井上人とオンライン交流会参加希望」と題してメールアドレス宛までご連絡下さい。」
折り返しＺｏｏｍミーティングの招待ＵＲＬをお送りいたします。

南大会メール

南天会事務局と、亀井佑二（竜亀）氏との最近の出来事について

今年４月からナグプールの佐々井師の元に行っていた亀井氏が、６月２２日に帰国されたとのことです。氏の現在の活動について、今号の「龍族」本文では、ご報告しておりません。その理由について、本号末尾ではありますが述べさせていただきます。

以下、昨年末から現在までのいきさつです。

昨年１１月、亀井氏が行った高額な高野山ツアーに佐伯が疑問を呈し、また今年４月に、中村が特定商取引法で規制された連鎖販売取引であるアムウェイのディストリビューター山崎氏との交流を批判したことで、亀井氏から、南天会とは行動を別にしたいとの申し入れがありました。

また、批判したことについて謝罪せよ、「納得のいく謝罪」がなければ法的措置を取る（損害賠償請求、侮辱罪、名誉毀損）との、度重なる亀井氏本人からの通告があり、佐伯が責任を感じて事務局代表を退任することとなりました。

中村も、事務局を巻き込みたくないとして退任し、４人いた事務局は、現在は小林と、私小池の２人となり暫定的運営をしております。

こうしたことは、支援者の皆さまの混乱を避けるために公表しておりませんでした。また、５月にはFacebook上で亀井氏に謝罪しました。謝罪により事態を鎮静化するためと、亀井氏から重要な約束を取り付けることが出来たからです。

アムウェイに限らず、連鎖販売取引は日本では合法ではありますが、消費者庁に数多くの苦情がよせられる、社会的に問題のあるビジネスである、と私たちは認識しています。

亀井氏がそうした団体とかかわることは、佐々井師の下で出家した僧としてふさわしくないと考えますし、また南天会会員が巻き込まれないか懸念しております。

昨年、小池は、亀井氏から「すばらしい人がいるので会って欲しい」とのことで、名古屋駅である人物にご挨拶しました。なんの印象も残らない短時間のもので忘れておりましたが、その人物が山崎氏でした。その後は、彼のセミナーの案内メールが送られてきています。

私は、亀井氏の謝罪要求に対して、条件として、山崎氏のビジネス（アムウェイに限らず、セミナーの勧誘が多い）を南天会会員にはしないとの約束を取り交わすことが出来ました。

その約束は、早々に破られましたが、私以外にはそのようなことがないように、亀井氏から南天会会員に勧誘があれば山崎氏と絶縁する、との回答をいただきました。

ここに至り、亀井氏には約束通り、Facebook上で謝罪した、というのが真相です。

引き続き、佐々井師の支援活動と、インド仏教復興運動支援を続けて参ります。そこに迷いはございません。

しかし、今回のことには大いに悩み、迷いました。６月３０日、佐々井師にご連絡し、本文章を読み上げ、聞いていただきました。

「日本の事情はよく分からない。亀井には亀井の道がある。南天会と分かれて活動をするのだろう。亀井に、南天会の皆さんには、関わらないようにとの一文を添えてください。」

とのことでした。

以上、会員の皆様にご報告申し上げます。

（事務局　小池一郎）

南天会会費・支援金（2022 年 1 月 1 日～5 月 12 日）支援金 959,500 円+32,597 ルピー

（現地支援の状況）
全世界的なコロナ禍も収束へと向かいつつあります。本年度のインドは記録的な酷暑となりましたが、佐々井上人は 4 月のアンベードカル誕生祭、5 月の灌仏会とイベントをひっきりなしにこなされていました。インド渡航ビザもいよいよ緩和され、本格的な交流も間も無く再開になりそうです。佐々井上人来日についても来年を目処に準備を進めたいと思います。是非日本の皆様からの佐々井上人への励まし、ご支援を引き続きよろしくお願い申し上げます。

◆南天会現況（令和４年７月１日現在）
正式会員数　２１７名
龍族発送者　３６８名
※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人（５０音順）
漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）
奥平心月（釣月庵庵主）
織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）
小野重徳（仏国土の会会長）
黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）
小池一郎（株式会社マクシス・シントー常務取締役）
高山龍智（佐々井上人お弟子）
土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）
冨士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）
宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職）
宮本光研（真言宗御室派元執行）
宮本龍勝（佐々井上人お弟子）
山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について
当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について
南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで
【金融機関】ゆうちょ銀行
【加入者名】南天会
【口座番号】０１３８０－０－９０１６４
「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。
※他金融機関からの振込用口座番号
　店名（イチサンキュウ）一三九店（１３９）
　当座　００９０１６４

会員種類と年会費
支援会員　１０，０００円（会費＋支援金）／年
一般会員　　５，０００円／年
学生会員　　２，０００円／年（※大学生まで）
※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。
一般会員令和２年入金済→　一般Ｒ２

Syncable（シンカブル）からも寄付ができます
オンラインで会費や支援金の決済ができる寄付プラットフォーム Syncable に団体登録しました。インターネットで Syncable を検索していただき、「団体を探す」→「南天会」で寄付ページを開けます。各キャンペーンも行っておりますので、ご参照ご紹介ください。
Syncable（シンカブル）QR コード

龍尾言
前号の発行から少し間が空いてしまい申し訳ありませんでした。佐伯が自坊での仕事が多忙となり今号で代表を退任となりました。でも、南天会の活動へは変わらず参加しておりますのでご安心ください。南天会発足からもう８年が経ちました。少しだけ自負できるような実績も積み重なってきたように思います。これからも佐々井上人に関わる人々が連携し、佐々井上人の力となれる場所として、しっかりと維持していきたいと思います。
引き続きご協力よろしくお願いいたします！
（小林）

南天会事務局
〒179－0075
東京都練馬区高松 4-16-3-102
小林三旅（090－4538－2677）
佐伯隆快（090－5304－8955）
メール　nantenkai@gmail.com
南天会フェイスブック・ツイッターご利用ください